

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 26 日現在

機関番号：34510

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520047

研究課題名(和文) プラトン後期対話篇における問答法と倫理的・政治的知のあり方

研究課題名(英文) Dialectic and Ethico-Political Knowledge in Plato's Later Dialogues

研究代表者

高橋 雅人 (TAKAHASHI, Masahito)

神戸女学院大学・文学部・教授

研究者番号：90309427

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はプラトン後期対話篇である『政治家』と『国家』などの他の対話篇との関連を問い、それによって『政治家』における政治的・倫理的知の特徴を解明することを目的としていた。研究の結果、『政治家』で論ぜられている理想的政治家は、『国家』の理想国の哲人王ではなくて、理想国の創設者であることを明らかにした。また『ゴルギアス』で語られている真正の弁論術が、『政治家』において王の知識とともに正しいことを市民たちに説得する役割を有するものとなっていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to clarify some features of ethico-political knowledge in one of Plato's later dialogues, the Statesman, by inquiring the relationship between this dialogue and his Republic and others. I have elucidated that the ideal statesman in Plato's Statesman is not the philosopher king of his ideal city in the Republic, but its founder. I also have shown that the authentic rhetoric discussed in the Gorgias has got a role to persuade citizens of what is just in partnership with kingship in the Statesman.

研究分野：倫理学

キーワード：プラトン 『政治家』 『国家』

1. 研究開始当初の背景

(1) プラトン『国家』における政治哲学への関心の高まりや、プラトンの『国家』や『法律』とアリストテレスの『政治学』との関わりを問うなど、近年、プラトン研究において政治哲学への関心が高まっていた。

しかしその中であってプラトンの『政治家』に対する関心はそれほどではなかった。もちろん、注釈書では Christopher Rowe, *Plato: Statesman*, Warminster, 1995 があり、研究書では M. S. Lane, *Method and Politics in Plato's Statesman*, Cambridge, 1998 を挙げることができるが、『政治家』を後期プラトンの中で適切に位置づけたとは必ずしも言えなかった。

また、Malcolm Schofield, *Plato: Political Philosophy*, Oxford, 2006 はプラトン政治哲学研究の一つの達成であると評価できるが、『政治家』の議論は非現実的な位相にとどまっているとされていた。だがこのような解釈が妥当であるとは研究代表者には思えなかった。

(2) 研究代表者は、2010年3月に『プラトン『国家』における正義と自由』(知泉書館)を上梓し、『国家』は一般に考えられているような自由の価値を貶めている書ではなくて、むしろプラトン哲学全体において初めて自由の哲学的価値を評価した対話篇であることを論じた。これにより、『国家』と善き国家の条件として「知性」と「友愛」の他に「自由」を数える『法律』との関連を明らかにした。

この研究成果の延長線上に、さらに『政治家』を位置付けることができないだろうかというのが、代表者の関心であった。

特に代表者が関心を抱いていたのは、問答法であった。『国家』で「善のアイデア」を学ぶ方法として語られた哲学的問答法(ディアレクティケ-)は、『パイドロス』において「総合と分割」からなる方法として捉え直され、その実際の使用(特に分割法)が後期対話篇の『ソピステス』と『政治家』で見られる。この後期の「分割法」は、一見したところ、『国家』の哲学的問答法(ディアレクティケ-)ときわめて異なっているため、果たしてこれら両者がいったいどのように関係づけられるのかという問題が、プラトン解釈上重要なものとしてある。

この問題を解く鍵として代表者が想定していたのは、『政治家』の問う「政治家とは誰か」という問いそのものであった。というのも、代表者は上述の『プラトン『国家』における正義と自由』において、初期対話篇において厳しく区別されていた「何であるか」と「どのようなものであるか」との二つの問いが、『国家』ではともに正義の解明のために問われており、しかも魂の内にある正義は「どのようなものであるか」という問いによって問われていることをも明らかにしていたので、「政治家とは誰か」を問うとは「政

治家の魂の内にある政治的知とはどのようなものであるか」を問うことであると考えられたからである。もしこれが正しければ、『国家』と『政治家』の問いの類縁性を手掛かりに、ディアレクティケ-と分割法との連続性を解明することができるのではないかと期待された。

以上が、研究当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、『政治家』における分割法と、その使用によって得られる政治的・倫理的知のあり方とのそれぞれについて、その特質を明らかにすること、そして第二に、第一の目的を達成することによって『政治家』という対話篇の『国家』との関連、および後期対話篇における位置づけ、とりわけ『法律』との関わりを解明すること、であった。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者単独による研究であり、プラトン後期対話篇、とりわけ『政治家』のテキストを熟読した上で、二次文献を渉猟し、国内外の研究者との議論を重ねるといった方法によって研究を遂行した。とりわけ、国外の研究者との議論は、国際学会での代表者自身の発表に基づいたものであり、有益であった。

研究成果は、学会での口頭発表や学術雑誌への投稿、一般向けの図書を含む共著の出版によって公にした。

4. 研究成果

(1) 『政治家』と『国家』との関係を問うために、まずは『国家』における自由の問題を拙著『プラトン『国家』における正義と自由』において展開した思索を再検討することでより精緻に考察した。

この課題は二つの観点からなされた。一つはプラトンの理想国は自由な国家であるのか、またもし自由であるとすればいかなる意味で自由なのかという観点である。この点については、理想国において、一方で非支配者は様々な権利を認められている限りにおいて自由人であり、そのことをプラトンも認めていること、他方で支配者は逆に様々な権利を制限されているが哲学という自由な活動を存分に許されていることから、やはり自由人であることが確認された。そしてこのような理想国を可能にしている条件の一つが、支配者たちが私有財産を放棄するという政治権力と経済的豊かさの分離にあることを指摘した。しかしこのことにより、アリストテレスの『政治学』の議論の検討が必要となった。というのも『政治学』では政治に交代に携わる市民は裕福であることが望ましいとされているからである。

『国家』における自由の問題を検討する第二の観点は、プラトンによる古代民主制に対

する批判からのものである。プラトンによれば、民主制国家と彼の理想国以外の国においては、支配者と非支配者の関係は主人と奴隷の関係であり、しかも当人たちがそのように自己認識をしているのに対して、民主制国家においては、両者の実際の関係は他の国と同じく主人と奴隷のそれであるのに、民主制国家の民衆は自らが奴隷であるとは認識していない。すなわち彼らは自己欺瞞に陥っているのである。なぜそのようなになってしまうのかと言えば、それは民衆が善についての正しい認識を欠いているためである。だからこそ善のアイデアの認識が哲人王に求められるのである。

(2) 以上を踏まえ、『政治家』と『国家』、および『政治家』とアリストテレスの『政治学』との連関を問うた。その結果、まず『政治学』における最善のポリス共同体では、農民や職人などの人々はポリスにとって必要不可欠とされながらも、ポリスの部分としては認められず、彼等は奴隷ないしペリオイコイであることが望ましいとされていることをテキストに基づいて確認した。これに対してプラトンの『国家』の理想国では、農民や職人など経済活動に従事する人々は守護者と補助者を支える「養育者」として理解されており、アリストテレスの理解とは大きく異なって、理想国の部分である。確かにどちらにおいても政治的権利は制限されているが、豊かさにおいては大きな違いがある。プラトンの理想国では「養育者」たちだけに私有財産を有することが認められているからである。『政治家』においても哲人王こそ想定されていないが、農民や職人がポリスの市民、すなわち自由人であることは当然とされている。

では哲人王の有無によって『政治家』と『国家』では異なった政治哲学がプラトンによって展開されていると考えるべきなのだろうか。この問に対して研究代表者は、異なっているとするマルコム・スコフィールドとケヴィン・M・チェリ - の解釈を批判し、『国家』と『政治家』の連続性を主張する C・H・カ - ンの立場に与する。ただし、カ - ンが『国家』の哲人王と『政治家』の理想的政治家を同一視するのに対して、研究代表者は同一視すべきではないことを明らかにした。なぜなら、哲人王は国家の守護者として国家の基本的かつ重要な法を改変しないとされているのに対して、『政治家』の理想的政治家は場合によっては法律を超えた判断をなすことが許されており、その意味で彼は法を超えた存在であるからである。したがって、『政治家』の理想的政治家は、『国家』の理想国の法を定める立法者ないし創設者として理解しなければならない。これが本研究の成果の一つである。

(3) 研究の進展に従って、『国家』のディアレクティケ - (問答法) と『政治家』の分割法の比較検討に先立って、問答法と弁論術との相違と連関について考察すべきことが明

らかになってきた。事実、『政治家』において政治的知識の定義を求める際に、その知識から弁論術を切り離すことが重要な課題になっている。そこでこの課題を果すために、初期対話篇の『ゴルギアス』の弁論術批判を検討した。周知のように『ゴルギアス』においては通常の弁論術は知識に基づいた技術ではなくて迎合にすぎないと厳しく批判されるが、他方で、「不正を行ったならば裁きを受けないよりも受けるほうが善い」という問答法によって確立された知識に則して裁判官を説得すべきであるが、このような説得に弁論術は有益であり、それこそ真正な弁論術にほかならないと『ゴルギアス』では主張される。

このような弁論術の規定は、弁論術を常に手段としてのみ理解しているから可能であることを研究代表者は明らかにした。また、まさにこの理解が『政治家』と共通であることを指摘した。『政治家』では、弁論術は王の知識とともにあって、正しいことを市民たちに説得すると語られているからである。

今後、この知見を手がかりに、問答法と分割法の連関の解明に取り組みたい。

(4) 『政治家』の統一的な理解のためには宇宙の逆回転が語られる「神話」の解釈が必須である。この神話が語られることによって政治家とは誰かという対話篇の主要な問が新たに問い直されるからである。

この神話をめぐっては、回転のサイクルが二段階とする伝統的な解釈に対して、クリストファー・ロウ等による三段階解釈が提出されている。研究代表者は伝統的な解釈に与するが、ただし回転のサイクルは永遠に繰り返されるのではなくて、宇宙の操舵者として神が帰還して以降は、逆回転は起こらないと解釈する。このような宇宙の操舵者としての神は『ティマイオス』のデ - ミ - ウ - ルゴスと親和的であると考えられる。

この関連で、プラトン後期における神の問題を問う必要性を感じ、『法律』における神と知性と魂の関係を考察した。その結果、魂なしに知性は存在することができないという解釈に対して、魂なしに知性は存在することができて、そのような知性こそが『法律』における神であり、天体としての神々は常にその知性としての神を自らの内に宿しているのに対し、人間の魂はそうではないという見解に至った。

今後、この解釈に基づいて、『政治家』における神と神話の解釈をより精緻なものとし、それによって『政治家』の対話編としての統一性を解明したいと考えている。

(5) 一般向けの書において、ソクラテスのいわゆる「無知の知」が持つ意義について、日常と政治との関わりの中で考察した。私達は日常を遅滞なくかつ滑らかに生きていくために様々な専門知とそれを有する専門家を必要としているが、ソクラテスは専門家の意義を十分に認めながら、専門家であることと

哲学者であること、すなわち「無知の知」を有する者であることとのどちらを選ぶかを自らに問い、「無知の知」を手放さない者であり続けることを選択した。このソクラテスの選択は、高度に発達した科学技術なしには存続することができない現代において、よりいっそうその意義が際立つ。なぜならば、高度の専門化はどのような人をも自分の専門以外の事柄についての無知を深めるからであり、それゆえにこそ「無知の知」の意義は現代の政治的・社会的状況においてより重要性が増しているからである。

今後は、『政治家』においてソクラテスの「無知の知」がどのように位置づけられるのかについて考察する予定である。それはこの対話篇におけるソクラテスの現存の意味を明らかにするはずである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

TAKAHASHI, Masahito, 'Plato on Wealth and Freedom', *Skepsis*, XXII/i, International Center for Universal Dialogues. 2012, pp. 416-424. 査読有。

高橋雅人、「哲人王と理想的な政治家」『神戸女学院大学論集』第61巻第1号、2014年6月、pp. 127-137. 査読無。

[学会発表](計4件)

TAKAHASHI, Masahito, 'Plato on Wealth and Freedom', The Ninth World Congress of International Society for Universal Dialogues: "Democratic Culture: Historical Reflections and Modern Transformations", 24 July 2012, Olympia (Greece).

TAKAHASHI, Masahito, 'Concept of Freedom in Plato's Politeia', Freedom and the State: Plato and the Classical Tradition, 7 August 2012, Oxford (UK).

TAKAHASHI, Masahito, 'Making Speeches about Justice: Rhetoric and the Socratic Elenchus', International Conference "Plato & Rhetoric", 26 April 2014, Keio University (Yokohama, Kanagawa).

[図書](計4件)

高橋雅人(共著)直江清隆・越智貢編『高校倫理からの哲学1巻 生きるとは』、岩波書店、2012年、「はじめに」pp. ix-x; 「第1講 人と人をつなぐものはなにか 身体と愛」、2-41.)

高橋雅人(共著)直江清隆・越智貢編『高校倫理からの哲学別巻 災害に向き合う』、岩波書店、2012年、「人知を超えるものにかにして向きあうか」津波・原発・哲学」、pp. 73-91.)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 雅人 (TAKAHASHI, Masahito)

神戸女学院大学・文学部・教授

研究者番号：90309427